埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討：両親の養育態度（PBI）と自尊感情・他者軽視との関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): youth, self-competence, parental bonding instrument (PBI), self-esteem, disrespect for others 作成者: 尾形, 和男, 増南, 太志 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1416

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討
― 両親の養育態度（PBI）と自尊感情・他者軽視との関連 ―

Examination of Factors Affecting Adolescent Self-Competence Formation of Youth
Relationship Between the Parental Bonding Instrument (PBI) and Self-Esteem / Disrespect for others

尾　形　和　男・増　南　太　志
OGATA, Kazuo　MASUNAMI, Taiji

両親の養育態度（PBI）が自己有能感の構成要素である自尊感情を他者軽視にどのように影響しているか分析検討を加えた。結果として愛情や共感があるとともに、過保護にならず自律を促進する養育態度が自尊感情を高めるために重要であると考えられた。その一方で、両親の養育態度と他者軽視については、父親の養育態度のみ他者軽視との関連が認められた。以上の結果に関して、そのメカニズムを更に検討する必要があるが、それについては内的ワーキングモデル（IWM）を取り入れた視点が必要と考えられる。

問題と目的

最近の若者の行動特徴の一つとして自己肯定感が諸外国の青年と比較して低いということが指摘されていることが挙げられる。自己肯定感とは自尊感情とも重複するものであるが、自尊感情とは自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚（山本, 2005）とされている。

子どもの自尊感情形成に及ぼす影響についてはいくつかの視点に基づいて検討がなされており、子育てに関する視点から親の養育態度に焦点を当てたもの、夫婦関係を中心とする家庭環境に焦点を当てたもの、小学校などの教育の場においての友人関係の在り方そして教師の関わり方などが挙げられる。これらの諸要因として指摘されるものは個々に影響するというよりも、相互に影響している場合もあると考えられる。多くの先行研究ではそれぞれを個々に取り上げて分析している場合が多く、家庭と教育の場とを関連付けて検討している研究は殆ど見られない。

その理由として考えられるのは、家庭と教育の場については家庭と教育現場の相互の協力体制基づく子育てが強力に進行しているとは言い難い現状があること、また家庭内の養育と学校教育が別々に捉えられる傾向があることなどが考えられる。このような背景に基づいて、最近の研究の多くは養育態度を中心とする家庭環境、教育現場のそれぞれの立場から分析が行われている。

本研究はこのような背景に基づいて、子ど

キーワード：青年、自己有能感、養育態度（PBI）、自尊感情、他者軽視
Key words ：youth, self-competence, parental bonding instrument (PBI), self-esteem, disrespect for others

もの成長・発達の重要な根幹を成す親の養育に焦点を当てる。養育態度とは、原田（2008）によれば、親が子どもを育てるにあたって意図的あるいは無意識的にとる一般的な態度・行動とされている。親の養育態度を取り上げたものについては、児童期の男子では母親の受容、緩い統制、自律性の尊重の組み合わせが最も高い自己評価をもたらし、女子では受容、厳格なしつけ、自律性の尊重が最適な組み合わせであること（Kawash, Kerr & Clewes, 1985）、小学校５、６年生では母親の支持が大きいほど、罰が穏やかなほど子どもの自己評価が高い（Growe, 1980）ことが指摘されている。また、園田（2013）は幼児の自尊感情と母親によるしつけ行動との関連性について、自立を促すようなしつけを多くとるほど、子どもは自分が学習面で有能であると感じており、手を貸しすぎるしつけ行動は子どもが運動面で有能でないと感じることを指摘している。一方で、春日・宇都宮（2011）は大学生の過去に親から受けた期待を感じた程度と現在の自尊感情の関連性から、親からの期待の受け取り方が自尊感情に影響しており、しかも母親の期待は父親以上に影響しているとしている。

自尊感情形成に影響する要因と考えられる親の養育態度について、多くの先行研究ではライフステージに基づいて、幼児期、児童期、中学生という発達段階ごとに分析を行っている。しかし、発達は親の養育に基づき進行していると捉えられる。したがって、ライフステージごとに取り上げた場合、その段階での養育行動と子どもの自尊感情の関連性を検討することは可能であるものの、より連続した視点からの分析が求められる。このことに関して、柴山・新井（2004）はRosenberg（1965）の自尊感情尺度を用いると同時に、16歳までの両親の養育態度についてはPBIを用いることにより、女子は父親・母親ともに自主独立を促されたと感じる場合高い自尊感情を持つこと、そして男子学生は母親との間にのみその関連性が確認されたことを指摘している。

一方、自尊感情と対極に位置する他者軽視はその個人の対人関係の基盤をなすものであり、自己有能感形成の重要な要因として存在する。自尊感情と他者軽視はRosenberg（1965）の自尊感情尺度の下位尺度として位置づけられ、両者の在り方によって自己有能感の在り方が形成され、個人を特色づけるものである。言葉を換えれば両者のバランスの在り方によってその個人を特色づけるものである。他者軽視がもたらす行動傾向として、いじめ、攻撃的行動などが指摘されこれに関する研究は最近増加しているが、その形成要因については殆ど検討されていない。その形成要因については家庭環境を始めとして、友人関係など考えられるが、ここでは親による養育態度に焦点を当てる。

以上の視点に基づき、本研究では大学生の自尊感情と他者軽視が親の養育態度とどのような関連性を有するのか検討する。その際、既述のようにライフステージごとの分析に基づくのではなく、中学生までの養育態度の積み重ねによる影響から検討を加える。ここでは中学生（16歳）までの親の養育態度を測定するPBI（Parental Bonding Instrument）の日本版（小川, 1991）用いて測定する。

方法

1　調査対象

埼玉県のＡ大学の167名［１年生65名、２年生85名、３年生７名、４年生10名］、平均年齢

18.91歳を対象とした。

2　調査用紙

（1）自分が16歳までに受けた親の養育態度を測定する尺度25項目。Parker, Tupling, & Brown（1979）のPBIの日本語版（小川, 1991）を用いた。父親・母親共に同じ項目からなる。

（2）自尊感情を調べる10項目。Rosenberg（1965）による自尊感情を測定する質問紙の日本語版（山本・松井・山城, 1982）を用いた。

（3）他者軽視を調べる11項目。速水・木野・高木（2004）が開発した仮想的有能感を測定する質問紙の改訂版（Hayamizu, Kino, Takagi & Tan, 2004）を用いた。この質問紙は他者軽視の測定に用いる。

（1）～（3）の質問紙は全て4段階評定であった。

3　調査時期

2021年5月に、講義を通して調査の主旨と内容を説明し、協力に承諾してくれた学生に講義後、調査用紙を配布し、後に回収した。

4　倫理的配慮

説明にあたり、研究の目的、個人情報の保護、個人的に見るものではなく全体の傾向を見るものであること、またデータ入力後はアンケート用紙はシュレッダーで処理すること、コンピューターに入力したデータは外部との接続が無いことなどを伝え、守秘義務に基づき迷惑をかけない旨説明を行った。

結果

1．各尺度の信頼性の確認

本研究で用いた質問紙の信頼性を確認するため α 係数を算出した。本研究では、α 係数の基準を0.70とした。

（1）PBIによる養護因子と過保護因子の信頼性の確認

自分が受けた養育態度を測定する尺度は、父と母それぞれにつき養護因子と過保護因子に分けられる。Table 1に養護因子の各項目、母の養育態度における養護因子の α 係数、父の養育態度における養護因子の α 係数を示した。α 係数はそれぞれ0.91、0.92であり、いずれも十分な信頼性が確認された。

次に、Table 2に過保護因子の各項目、母の養育態度における過保護因子の α 係数、父の養育態度における過保護因子の α 係数を示した。α 係数はそれぞれ0.80、0.76であり、いずれも十分な信頼性が確認された。

（2）自尊感情及び他者軽視の各項目の信頼性の確認

自尊感情の各項目と α 係数をTable 3に示した。α 係数は0.82であり、十分な信頼性が確認された。

次に、他者軽視の各項目と α 係数をTable 4に示した。α 係数は0.89であり、十分な信頼性が確認された。

2．養護因子と過保護因子による類型化

養護因子と過保護因子の中央値をもとに、対象者を4つの養育態度に分類した。4つの養育態度は、「情愛と過保護」（養護因子・過保護因子ともに中央値よりも高い）、「情愛と

Table 1　養護因子の各項目とα係数

項目	α（母）	α（父）
1 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた		
2 私が必要とするほどは助けてくれなかった（＊）		
4 情緒的には私に冷たいように思えた（＊）		
5 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた		
6 私に優しく、慈愛があった		
11 私と物事について語り合うのを楽しんだ	0.91	0.92
12 よく私に微笑みかけた		
14 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった（＊）		
16 私は求められてないなと感じさせられた（＊）		
17 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた		
18 私とは多くは話さなかった（＊）		
24 私をほめることはなかった（＊）		

（＊）は逆転項目を表す

Table 2　過保護因子の各項目とα係数

項目	α（母）	α（父）
3 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた（＊）		
7 私が自分自身で決定を下すのを好んだ（＊）		
8 私に成長してほしくなかった		
9 私のすることはすべてコントロールしようとした		
10 私のプライバシーをおかした		
13 私を子どもあつかいしがちだつた		
15 私自身に決定を下させた（＊）	0.80	0.76
19 私を（父・母）に依存させようとしていた		
20（父・母）がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた		
21 私が望むだけの自由を与えてくれた（＊）		
22 望むだけ外出させてくれた（＊）		
23 過保護だった		
25 私が好むような服装をさせてくれた（＊）		

（＊）は逆転項目を表す

Table 3　自尊感情の各項目とα係数

項目	α
1 私は自分に対して肯定的である	
2 私は、人並みには価値のある人間である	
3 私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい（＊）	
4 自分が全くダメな人間だと思うことがある（＊）	
5 私はいろいろな良い素質を持っている	0.82
6 私は何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う（＊）	
7 私は物事を人並みには、うまくやれる	
8 自分には、自慢できるところがあまりない（＊）	
9 私は自分のことを敗北者だと思うことがよくある（＊）	
10 私はだいたいにおいて、自分に満足している	

（＊）は逆転項目を表す

自律承認」（養護因子が中央値よりも高く、過保護因子が中央値よりも低い）、「冷淡と干渉」（養護因子が中央値よりも低く、過保護因子が中央値よりも高い）、「無関心」（養護因子・過保護因子ともに中央値よりも低い）である。

Table 4　他者軽視の各項目とα係数

項目	α
1 自分の周りには気のきかない人が多いと思う	
2 自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	
3 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りには少ない	
4 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる	
5 世の中には、常識のない人が多すぎる	
6 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	0.89
7 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	
8 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	
9 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	
10 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	
11 他の人を見ていると「ダメな人だ」と思うことが多い	

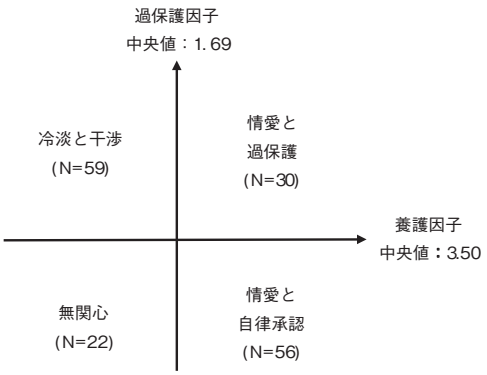

Figure 1　母の養育態度の類型

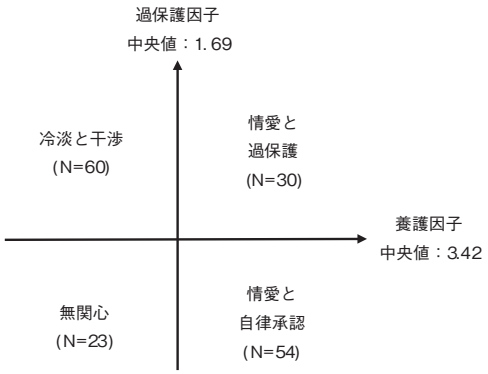

Figure 2　父の養育態度の類型

母の養育態度については、養護因子の中央値が3.50、過保護因子の中央値が1.69であった。これらの中央値に基づき、母の養育態度を４つに類型化した結果をFigure 1に示した。対象者の人数は、情愛と過保護が30名、情愛と自律承認が56名、冷淡と干渉が59名、無関心が22名であった。

次に、父の養育態度については、養護因子の中央値が3.42、過保護因子の中央値が1.69であった。これらの中央値に基づき、父の養育態度を４つに類型化した結果をFigure 2に示した。対象者の人数は、情愛と過保護が30名、情愛と自律承認が54名、冷淡と干渉が60名、無関心が23名であった。

３．母及び父の養育態度のタイプと自尊感情・他者軽視の関連

自尊感情、他者軽視の各々の状況にある人がどの様な養育を受けたと捉えているかを明らかにするために母の養育態度のタイプを独立変数、自尊感情と他者軽視を従属変数とした分散分析を行った結果、自尊感情に有意差が認められた（F（3,163）＝6.99, p<0.001）。したがって、母の養育態度のタイプについて、多重比較（*Tukey*法）を行った結果、情愛と自律承認が、情愛と過保護及び冷淡と干渉よりも自尊感情が高いことが示された（Table 5）。次に、母の養育態度のタイプを独立変数、他者軽視を従属変数とした分散分析を行った結果、有意差は認められなかった（F（3,163）

Table 5　母の養育態度の類型による自尊感情・他者軽視の比較

	情愛と過保護（情過）平均（SD）	情愛と自律承認（情自）平均（SD）	冷淡と干渉（冷）平均（SD）	無関心（無）平均（SD）	F	p	多重比較（*Tukey* 法）
自尊感情	2.32（0.61）	2.66（0.54）	2.22（0.49）	2.31（0.57）	6.99	***	情自＞情過・冷
他者軽視	2.09（0.47）	1.93（0.62）	2.12（0.65）	2.06（0.40）	1.16		

† $p < .10$, *$p < .05$, **$p < .01$, ***$p < .001$

Table 6　父の養育態度の類型による自尊感情・他者軽視の比較

	情愛と過保護（情過）平均（SD）	情愛と自律承認（情自）平均（SD）	冷淡と干渉（冷）平均（SD）	無関心（無）平均（SD）	F	p	多重比較（*Tukey* 法）
自尊感情	2.32（0.55）	2.66（0.51）	2.23（0.53）	2.31（0.63）	6.32	***	情自＞情過・冷
他者軽視	1.95（0.50）	1.88（0.60）	2.20（0.62）	2.10（0.48）	3.30	*	冷＞情自

† $p < .10$, *$p < .05$, **$p < .01$, ***$p < .001$

$=1.16, p=0.33$）。

また、父の養育態度のタイプを独立変数、自尊感情を従属変数とした分散分析を行った結果、有意差が認められた（F（3,163）$=6.32$, $p<0.001$）。したがって、父の養育態度のタイプについて、多重比較（Tukey法）を行った結果、情愛と自律承認が、情愛と過保護及び冷淡と干渉よりも自尊感情が高いことが示された（Table 6）。さらに、父の養育態度のタイプを独立変数、他者軽視を従属変数とした分散分析を行った結果、有意差が認められた（F（3,163）$=3.30$, $p<0.05$）。多重比較（*Tukey* 法）を行った結果、冷淡と干渉が情愛と自律承認よりも他者軽視が高いことが示された（Table 6）。

考察

本研究では、幼少期の両親の養育態度と自己有能感を構成する自尊感情及び他者軽視の関係を検討した。以下では、両親の養育態度と自尊感情の関係、両親の養育態度と他者軽視の関係についてそれぞれみていく。

1．両親の養育態度と自尊感情の関係

本研究では、母の養育態度と父の養育態度のいずれにおいても、情愛と自律承認が、情愛と過保護及び冷淡と干渉よりも、自尊感情が高いという結果であった。

山下・石暁・桂田（2010）は、大学生を対象として、子ども時代の両親の養育態度と自尊感情の関係を調査している。その結果、母の養育態度については、情愛と自律承認が冷淡と干渉よりも自尊感情が高く、父の養育態度については、情愛と過保護・情愛と自律承認・無関心が冷淡と干渉よりも自尊感情が高かった。情愛と自律承認が冷淡と干渉よりも自尊感情が高いという点は、両親に共通する部分であるため、山下･石暁･桂田（2010）は、愛情や共感があるとともに、過保護にならず自律を促進する養育態度が自尊感情を高めるために重要であると述べている。また、このことは、自主・独立を促されたと感じている者ほど高い自尊心をもつという柴山・新井（2004）の考えと一致しているとのことであった。

本研究の結果は、情愛と自律承認が、冷淡と干渉だけでなく、情愛と過保護との間にも

違いがみられた。情愛と自律承認は、情愛と過保護よりも過保護の度合いが低いということを考えると、山下・石暁・桂田（2010）の述べている「自律を促進する養育態度」が自尊感情に影響していることをより明確に示した結果であったといえる。

では、両親の養育態度は、どのようにして自尊感情に影響を与えるのであろうか。島（2014）は、大学生を対象に、子どもの頃の母親の養育態度の認知と、アタッチメントの内的作業モデル、社会的適応の関係を共分散構造分析によって検討している。このうち、社会的適応のうちの個人内要因の適応指標として自尊感情尺度を用いている。その結果、母親の養育態度は、内的作業モデルを媒介して自尊感情に影響を与えていることを示している。具体的には、養護因子（ケア）は、内的作業モデルの「回避」に負の影響を与え、「回避」は自尊感情に負の影響を与えるとしている。このことから、養護因子が高いと、内的作業モデルの回避を低下させ、自尊感情を高めると解釈できる。また、過保護因子は、内的作業モデルの「不安」に正の影響を与え、「不安」は自尊感情に負の影響を与える。そのため、過保護因子が高いと「不安」を高め、自尊感情を低下させると解釈できる。

本研究においても、自尊感情が高かった情愛と自律承認は、養護因子が高く過保護因子が低い状態であることを考えると、島（2014）の結果に一致しており、内的作業モデルが媒介して自尊感情を高めていると解釈することができる。

２．両親の養育態度と他者軽視の関係

本研究では、母の養育態度のタイプによる他者軽視の違いは示されなかったが、父の養育態度については、冷淡と干渉が、情愛と自律承認よりも高いことが示された。そのため、愛情や共感などの養護的な養育態度に乏しく、過保護的（あるいは干渉的）な養育態度であった場合に、他者軽視が高まる可能性が考えられる。

両親の養育態度と他者軽視の関係を検討した研究はみられないが、上述した島（2014）の内的作業モデルを用いた解釈によって考察する。冷淡と干渉は、情愛と自律承認よりも、養護因子が低く過保護因子が高い。したがって、養護因子が低いために内的作業モデルの「回避」が高まるとともに、過保護因子が高いために内的作業モデルの「不安」が高まると考えられる。「回避」や「不安」の高さは、社会的適応においてネガティブな影響を与えるものであり、その中でも「回避」が高いと、他者に対する信頼が低かったり、他者に頼ることができないなど、他者との関係の困難さに影響することを述べている。このことから他者を軽視する傾向があると、他者への信頼の低さや他者を頼らない態度がみられる可能性もあげられる。そのように考えると、冷淡と干渉において、他者軽視が高いのは、内的作業モデルにおける「回避」が何らかの影響を与えている可能性がある。

しかしながら、本研究では、父の養育態度のタイプによって他者軽視に違いがあることを示しただけであり、その間にどのような要因が影響しているのかについては示していない。また、母の養育態度のタイプによる他者軽視の違いは示されなかった。そのため、母の養育態度と父の養育態度の違いや、養育態度のタイプと他者軽視の関係については、今後の検討課題である。

３．今後の課題

本研究の結果、両親の養育態度と自尊感情の関係については、先行研究とほぼ一致する結果であった。すなわち、愛情や共感があるとともに、過保護にならず自律を促進する養育態度が自尊感情を高めるために重要であると考えられた。その一方で、両親の養育態度と他者軽視については、父親の養育態度のみ他者軽視との関連が認められた。しかし、親の養育態度が他者軽視にどのように影響するのかについては、内的作業モデルなどを考慮したうえで因果関係を分析していくことが必要である。特に、母親の養育態度については、その養育態度が他者軽視に直接影響しなくても、内的作業モデルなどを媒介することで他者軽視に影響する可能性も考えられる。今後の課題として、そのような養育態度と他者軽視を媒介する変数について検討する必要がある。

引用文献

Growe, G.A. 1980 Parental behavior and self-esteem in children. Psychological Reports, 47, 499-502.

原田博子　2008　母親の養育態度に関する研究Ⅰ－育てられ方との関連－　筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 3, 271-283.

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2004　仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 51, 1-8.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H.　2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness.　Asia Pacific Education Review, 5 (2), 127-135.

春日秀朗・宇都宮博　2011　親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響－子どもの期待に対する反応様式に注目して－　立命館人間学研究, 22, 45-55.

Kawash,G.F., Kerr,E.N.,& Clewes,J.L., 1985 Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. Journal of Psychology, 119, 235-242.

小川雅美　1991　PBI（Parental Bonding Instrument）日本版の信頼性、妥当性に関する研究　精神科治療学, 6, 1193-1201.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. 1979 A parental bonding instrument British Journal of Medical Psychology, 52(1), 1-10.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol. 11, p. 326). Princeton, NJ: Princeton university press.

柴山直・新井真由美　2004　青年期における性役割観と自尊心との関連：両親の養育態度への認識内容からの検討　新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編, 7（1）, 15-27.

島義弘　2014　親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果　発達心理学研究, 25（3）, 260-267.

園田菜摘　2013　幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情、しつけ行動との関連　横浜国立大学教育人間科学部紀要, 15, 1-7.

山本真理子　2005　心理測定尺度集Ⅰ　－人間の内面を探る（自己・個人内過程）－　サイエンス社

山本真理子・松井豊・山城由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30（1）, 64-68.

山下芙実子・石暁玲・桂田恵美子　2010　大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連：過保護という養育態度の検討　臨床教育心理学研究, 36, 21-26.